

平成 21 年 5 月 27 日現在

研究種目：若手研究 (B)  
 研究期間：2006～2008  
 課題番号：18720065  
 研究課題名 (和文) シェイクスピア受容史再考——翻訳・ナショナリズム・ジェンダー  
 研究課題名 (英文) Shakespeare in Japan Reconsidered: Translation, Nationalism and Gender  
 研究代表者  
 近藤 弘幸 (KONDO HIROYUKI)  
 東京学芸大学・教育学部・准教授  
 研究者番号：00302901

研究成果の概要：日本におけるシェイクスピア作品の翻案・翻訳受容について、フェミニズム理論を用い、またナショナリズムの観点から分析した。フェミニズム分析としては、日本で初めて女性としてシェイクスピア作品の全訳に取り組んでいる松岡和子の翻訳について、その功績と問題点を指摘した。ナショナリズムの観点からは、『オセロー』の翻案小説である宇田川文海『阪東武者』を、日本が「西洋化」することの不安を反映するテキストとして分析した。

## 交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,200,000	0	1,200,000
2007年度	500,000	0	500,000
2008年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
総計	2,100,000	120,000	2,220,000

研究分野：英文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ語系文学

キーワード：シェイクスピア、翻訳、フェミニズム、ジェンダー、ナショナリズム

## 1. 研究開始当初の背景

日本におけるシェイクスピア受容史研究は、研究分野としては古くからあるものであり、優れた研究成果も生み出している。しかしながら、受容史研究が、シェイクスピア作品そのものの分析に対して、副次的なものとして扱われてきたことは否定できない。シェイクスピア研究のグローバル化は、こうした傾向をさらに助長する結果となっている。

その一方で、そうしたグローバル化と相反す

る、あるいはそうしたグローバル化と相補的な関係にある流れとして、近年、「ローカルなシェイクスピア local Shakespeares」に対する学術的関心が高まりつつある。そこで求められているのは、単に「異国風」の「風変わりな」シェイクスピアを紹介あるいは断罪することではなく——従来の受容史研究は、ともすれば、そうした種類のシェイクスピア受容を「本場の」シェイクスピア研究者に紹介するという形式をとるものか、もしくはそうした種類のシェイクスピア受容を、「正当な」シェイクスピアからの「逸脱」として断罪す

るという形式をとるものが多かった——そうした受容を、それがおこなわれた歴史的・文化的・政治的文脈のなかで、副次的なものではないひとつの独立した事象として捉え、分析することである。

## 2. 研究の目的

本研究は、こうした流れを受け、フェミニズムおよびジェンダー研究の視点から、日本における「ローカルなシェイクスピア」のありようの一端を、ナショナリズムとの関連において考察することを、その目的とするものである。

明治日本におけるシェイクスピアの受容（翻案・翻訳）は、近代国家としての日本の建設、ナショナル・アイデンティティの構築にいかなる作用を及ぼし、いかなる関係にあったのか？ そのプロセスにおいて、「男性性」ないし「女性性」はどのように位置づけられていたのか？ あるいは、現代日本におけるシェイクスピア上演において、翻訳はどのような位置を占めているのか？ 翻訳家の生物学的性別は、その位置にどのような作用を及ぼすのか？

本研究はこうした問いを考察するものである。

## 3. 研究の方法

### (1) 基本資料の収集と分析

日本におけるシェイクスピア受容には、上演というパフォーマンス論的側面と、翻案・翻訳・批評というテキスト論的側面がある。このうち、本研究の主たる対象となるのは後者であり、これについては、『シェイクスピア翻訳文学書全集』（大空社）、『シェイクスピア研究資料集成』（日本図書センター）という形で、かなりのものが入手可能である。本研究においては、これらの一次資料の収集とその綿密な分析が、その基本的方法となる。

### (2) パフォーマンス研究関連の理論的枠組の援用

しかしながら本研究は、決してパフォーマンス論的側面を無視するものではない。シェイクスピア作品のローカルな上演行為に関する理論的考察によってえられる枠組は、本研究を位置づけるものとして、無条件にはではなく、批判的に使用されるべきものである。したがって、パフォーマンス研究関連の先行研究の成果を、分析し整理することが、本研究を遂行するための、重要な補助線的方法と

なる。

### (3) 翻訳研究 translation studies の理論的枠組の積極的導入

日本においては、翻訳研究が、いまだ学問的領域として確立しているとは言い難い状況にあるが、パフォーマンス論的側面よりもテキスト論的側面を重視する姿勢をとる本研究にとって、翻訳研究によってもたらされる知見は、パフォーマンス研究によってもたらされる知見に劣らず、むしろパフォーマンス研究によってもたらされる知見以上に、重要である。翻訳者の能動的・創造的役割や、翻訳プロセスにおける対象文化 target culture の源泉文化 source culture に対する優位を強調する翻訳研究の基本的立場は、「ローカルなシェイクスピア」の紹介もしくは断罪を目的とするのではなく、「ローカルなシェイクスピア」の「ローカルな分析」を目的としている本研究の遂行のうえで、きわめて示唆に富んだものである。したがって、本研究においては、翻訳研究の理論的枠組の積極的導入を、その重要な方法論として位置付ける。このことは、結果として、本研究に、いまだ未成熟な日本における翻訳研究の先駆的成果としての側面を与えることにもなる。

### (4) フィードバック

先述のように、近年、グローバル化と相反する、あるいはそうしたグローバル化と相補的な関係にある流れとして、「ローカルなシェイクスピア」に対する学術的関心が高まりつつある。本研究を国際的な学術的価値があるものとするため、内外の学会においてその中間成果を発表し、単なる「紹介」とどまらない、国際的な学術交流を図る。

## 4. 研究成果

### (1) 松岡和子のシェイクスピア翻訳の批判的検討

これまで、日本におけるシェイクスピアの翻訳受容史の登場人物は、その圧倒的多数を男性が占めてきた。その歴史を踏まえると、松岡和子が1996年から始めたシェイクスピア全作品の個人訳という事業は、画期的な「事件」である。松岡自身、そのことに自覚的であり、シェイクスピアのいわゆる〈四代悲劇〉のすべてを翻訳した日本人女性は自分が初めてである、という旨の発言をしており、また、日本シェイクスピア協会主催のシェイクスピアの翻訳に関するシンポジウムにおいては、自分がフェミニストであるということ公言している。実際、松岡の翻訳は、

フェミニズムに関心を持つシェイクスピア学者たちには、おおむね肯定的な評価を得ている。とりわけ評価されているのは、松岡の翻訳において女性登場人物たちが語る台詞の言葉づかいの処理である。日本語は、英語に比べて敬語が複雑に発達し、また男性語と女性語の違いが顕著な言語である。このため、英語から日本語への翻訳の場合、翻訳者がどのような表現を選択するかということは、その翻訳者や翻訳者が想定している観客が前提としている男性像、女性像を如実にあらわにする。松岡の言語選択は、より平等的であり、フェミニズム的翻訳として肯定的評価を与えられるべきものである。また、国際的にみても、女性によるシェイクスピア全作品の個人訳というのは、類を見ないことであり、フェミニズム的観点から見たときの、松岡の翻訳の意義は、いくら強調してもしすぎることはない。

しかしながら、松岡の翻訳は、フェミニズム的、ジェンダー論的論点の全てを満足させるものではない。以下、その問題点を指摘する。

#### ①「シンプルに訳す」ことの問題

松岡は、繰り返し、自分の翻訳の特徴は「シンプルに訳す」ことであると語っている。しかしながら、こうした主張は、オリジナルの作者＝男性、翻訳者＝女性という古典的な翻訳行為のジェンダー化を反復するものである。とりわけ、シェイクスピアという「西洋文学の大家」を「女性」が翻訳する場合、こうした反復行為は、「オリジナル＝西洋＝男性」対「翻訳＝東洋＝女性」というオリエンタリズムのステレオタイプを確認・強化する効果を持つ。フェミニズム的翻訳は、翻訳理論における翻訳者の創造性・優越性の肯定に立脚し、「逸脱」によってこうした確認・強化を打破しなければならない。

#### ②クィア理論からの批判

松岡は、「シンプルに訳す」ことが新しい解釈を生み出す事例として、自身の『マクベス』の翻訳を挙げている。松岡によれば、伝統的に「忠誠」と訳されてきた「love」を、そのまま「愛」と訳すことによって、新しい解釈の可能性が生まれる。しかしながら、『マクベス』の後に翻訳した『ヴェニスの商人』において、松岡は、男性間で交わされる「love」をそのまま「愛」と訳すことに頑ななまでに抵抗し、それを「友情」と訳している。〈翻訳劇〉である以上、男性同士が「愛」という言葉を使っても、それが必ずしも同性愛的意味合いを持つとは限らず、同性愛的にも非同性愛的にも上演は可能である。「シンプルに訳す」ことを主張する翻訳者が、このような「意識」に踏み込んでいることは、ホモフォ

ビックであると言わざるを得ない。

#### ③「解説」の問題

松岡は、これまでのシェイクスピア翻訳が、圧倒的に男性によっておこなわれてきたこと、数少ない女性翻訳者の仕事は、比較的「軽い」作品に限られていることに自覚的であり、さらに批判的である。しかしながら、松岡の翻訳が出版される際に、誰が「解説」を書いているかを見ると、松岡自身が批判しているはずの、作品のヒエラルキーのジェンダー化を、そのまま反復していることが明らかになる。

#### (2) 宇田川文海『阪東武者』の発掘と分析

明治日本における『オセロー』受容に関しては、条野採菊の『痘痕伝七郎』や川上音二郎一座による『正劇オセロー』公演が広く知られており、これらに関しては、先行研究も存在する。しかし、これまで受容史においてまったく語られなかった作品として、宇田川文海が『大阪毎日新聞』に連載した『阪東武者』が存在する。本研究の大きな成果の一つは、同作品を発掘したことである。

#### ①「黒さ」から「美醜」への置き換え

『痘痕伝七郎』、『阪東武者』において、オセローの「黒さ」は、「美醜」の問題に置き換えられている。これには、『籠釣瓶花街酔醒』のような歌舞伎作品の存在の影響が考えられる。また、これらはいずれも翻案小説であるが、それが「翻訳上演」へ移行する場合、「黒塗り上演」（リアリズム路線）を選択すれば、それは人種的ステレオタイプの反復となり、「黒塗り上演」を拒否（非リアリズム路線）すれば、それは「黒さ」の否定へとつながってしまう。この「置き換え」は、『オセロー』の「翻訳上演」は可能なのか？という問題を提起している。

#### ②「美醜」の政治学

こうした「人種」問題の「美醜」への置き換えは、一見すると『オセロー』という作品の持っていた政治性を喪失させる行為に見える。しかしながら、当時の「異人」表象、とりわけペリー総督の肖像画を考慮すると、その政治性が明らかとなる。『阪東武者』は、女性（＝日本）が、「異人」性を帯びた男性によって「西洋化」されることへの不安の政治学をあぶり出すテキストなのである。

#### (3) Ann Thompson and Neil Taylor (eds.), *Hamlet* の批判的検討

「翻訳」行為は、いわば「別の言語による本文編纂」行為である。したがって、「本文編纂」を批判的に考察・分析することは、本研究に大きく資する活動となる。そこで、Arden版第三版として出版された Ann Thompson and Neil Taylor (eds.), *Hamlet* の独自性・可能性を明らかにした。

(4)水戸芸術館 ACM 劇場公演『ジュリアス・シーザー』

松岡和子の翻訳に対する批判(上記(1)②を参照)に対する実践的批判研究として、シェイクスピアの『ジュリアス・シーザー』を実際に翻訳し、水戸芸術館 ACM 劇場において上演した。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

①近藤弘幸, Ann Thompson and Neil Taylor (eds.), *Hamlet*, *Shakespeare News*, 47 巻1号、28 頁-35 頁、2007 年、査読あり

[学会発表] (計3件)

①近藤弘幸、明治日本で『オセロー』を読む——条野採菊『痘痕伝七郎』と宇田川文海『阪東武者』、日本英文学会関東支部一月例会「シリーズ名作を読む②——『オセロー』」、2008.1.12、青山学院大学

②近藤弘幸、Interculturalism, Gender and Translation、第45回シェイクスピア学会「シェイクスピアと異文化プロダクション」セミナー、2006.10.9、東北学院大学

③近藤弘幸、Shakespeare / Translation / Gender: Matsuoka's Japanese Translations、VIII World Shakespeare Congress 'World Feminisms and Shakespeare Studies' Seminar、2006.7.17、Brisbane City Hall

[その他]

#### ①公演(翻訳)

近藤弘幸、『ジュリアス・シーザー』(ウィリアム・シェイクスピア作、桐山知也演出、2006年、水戸芸術館 ACM 劇場→水戸芸術館 ACM 劇場『WALK』54号 [2007]、121 頁-171 頁)

#### 6. 研究組織

##### (1)研究代表者

近藤 弘幸 (KONDO HIROYUKI)

東京学芸大学・教育学部・准教授

研究者番号：00302901

##### (2)研究分担者

##### (3)連携研究者